

「社会」でねらうものとその指導



舟 木 哲 朗

昭和三十年度に「幼稚園教育要領」が示された時、その六「領域」についていろいろな批判が出た。小学校における「教科」とは性格の異なるものであることが強調されているけれども、このことがすつきりしないし、誤解を受ける恐れがあるということも、批判の一つであろう。

しかし、幼稚園教育要領をよく読み、これを小学校学習指導要領と比較してみれば、六領域の意味はよくわかる。だから、「うわすべり」の読み方をしなければ、実は誤解の恐れはないともいえる。領域のワクで指導すべきものでないということは、内容をよく読めばすぐわかることである。このことは、「社会」の領域では特に注意を向ける必要がある。

「社会」の領域がどのようなねらいや内容をもっているかということは、学校教育法第七十八条の第二項・第三項（幼稚園教育

要領二ページ）、幼児指導の具体的目標の第二項（同書三ページ）、幼稚園教育の内容第二項（同書九―一二ページ）に示されている。これらの中には、表現は簡単でも内容的には多くのことがあがっている。しかし、ここで述べようとすることは、それらのすべてについてではない。ここでは特に中心的重点的にねらうべきものと、指導について特に強調したいことについての私見をまとめることにしたい。

ねらうもの

「社会」ということばが「個人」と対立するものであるような感じを与えることは事実である。しかし、このように考えることは正しくない。社会の中の個人であり、個人の集った社会であるというのが、社会と個人との関係だからである。

さて、幼稚園や保育所で「社会性」ということばがよく使われる。このこと自体は結構であるけれども、そのことのために「個人」の忘れられているのをよく見かける。その結果として、自身のおぼつかないのに他人へのおせっかいをする幼児が多かったり、幼児の集団が支配者と被支配者との関係になつたり、依頼心の強い幼児がでたりしている。教師や保育母の多くは、「既製品」のような幼児をつくろうとし、また、幼児を「個人」として育てることを忘れて、せっかちに「社会性」ということをあせり、おまかせな幼児をつくろうとしている。

「社会」の領域がねらうものは、決してそのようなものではない。「社会」のねらいは、要約すれば「集団生活への適応」ということになるが、その前提として「自主」「自律」ということを忘れてはならないし、集団生活においても、常に、集団の中の「個」ということを忘れてはならない。「幼稚園教育要領」の内容を例にとれば、「自分でできることは自分でする」「仕事をすすめる」の二項目が前提的な基礎として考えられ、自主・自律の精神を育てるとともに「個」の確立がはからなければならない。「友だちと仲よくしたり協力したりする」という項目は、このような前提的基礎に立って、集団の中で常に「個」を育てる態度を忘れずに指導されるべきである。基礎をつくらずに仲よくとか協力とかいったことをせっかちに考えて、形式だけをつくろうとしては

ならない。次に、「きまりを守る」ということは、集団生活においては必ず身につけなければならないことである。それだけに、この項目は、最初の二項目とともに、完全に習慣化されなければならない。いうまでもなく、きまりということは、他人との関係においていわれることである。しかしこの場合も、「個」を忘れるものでないことを強調しておかなければならないだろう。なお「物をたいせつに使う」という項目は、以上四つの項目と並行して考えるべきものである。

このほか、「幼稚園教育要領」では、「身近の人々」「道具や機械」および「家庭や近隣の行事」がとりあげられている。これらの項目は、集団生活への適応のための、関心や態度を育てるためのものである。知識を要求するものではない。

指 導

はじめに書いたように、これらの内容は、領域のワケで指導すべきものではない。またできるものでもない。「幼稚園教育要領」では、「社会」に属するまとまった活動の例として、いくらかの「ごっこ遊び」と「見学」と「行事」をあげている。しかし、これらの活動は、「社会」の領域だけで考えるべきことではない。また、その他の内容のほとんどは、まとまった活動があげられていない。これらのものには、他の活動に付随して行なうものが多

いのである（付随は軽視の意味ではない）。したがって、「社会」の領域で考える内容は、多くが他の活動に付随して行なわれるものであり、「部まとまった活動を行なうものについても、常に他領域との総合的な活動となるのが一般原則でなければならぬ」。例えば、「仕事をくふうしてする」といった内容は、それ自体の活動ではなくて、「絵画製作」その他の内容を中心とする活動に付随して指導すべきものであり、「売屋ごっこ」のような活動は、「自然」「言語」「絵画製作」などとの関連において、総合的に考えるべきものである。

一般的に言って、「社会」の指導はうまく行なわれていない。それは、この領域のもつ右のような特徴からきている（付随的に

指導すべきものが多い）ことと、「社会性」へのせつかちな態度からきていることによると思う。

最後に、幼児の社会性といわれるものは、まだその「芽」に過ぎない。真の社会性は、八才ころ（小学校三年ころ）以後をまたなければできてこない。先日ある幼稚園の「自由遊び」を見せてもらったが、四才児では「仲よく一人ひとり遊んでいる」という状態ではない。このことを正しく認識し、集団中での「個性」を育てるということを忘れないで、あせらずに「芽」をたいせつに扱いたいものである。せつかくの「芽」を摘み取ってはならない。

（島根県教育庁指導主事）

温かくしかもキリツとした保育者の姿勢



堀 内 康 人

広い目で見て、小学校などになりますと、こちらの小学校とあちらの小学校とで行なわれている教員の仕方や内容に著しい違い

がある、などということは、余りお目にかかる機会はないのですが、それが幼稚園や保育園になりますと、ひとときわ日だっどこ